
引きこもり副会長！

市川かうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

引きこもり副会長！

【Nコード】

N4474G

【作者名】

市川かうた

【あらすじ】

引きこもり生活が続ける中三の多野奏の元に、ある日突然生徒会長が。学校へ来てくれ、と頼む生徒会長の頼みを断る奏だったが…。

いきなりカミングアウトするが、僕は引きこもりだ。かれこれ2年ほど引きこもっている。

現在は中三。つまり中一から引きこもっているわけだが、まったくもって快適な生活だ。

前までは担任に言われてしつこく僕を誘っていたクラスメイトも今ではぱったりと来なくなっただし（大体お前らのせいで行かなくなっただから誘われても行く訳がない）、親も共働き故に煩く言うてこない。

素晴らしい生活だ。勉強も、人付き合いも、今の僕には必要ない。昼過ぎまで寝て、飯食って、ゲームやって漫画読んで寝ればいいだけの生活。

このまま行けばニートは確定だろうが知ったこっちゃない。僕の人生をどう過ごそうが僕の勝手なのだ。何より、僕はこの世界にはいない人間だから別にいいのだ。

「…腹減った」

枕元の時計を見ると、針は丁度午後1時をさしていた。

そろそろ飯にしよう、とベッドから降りようとした瞬間、一番聞きたくないものが僕の耳に届く。

ピンポン…ピンポン…

インターホン。セールスだか宅配便だかは知らないが、僕は出たつもりはない。

なんでわざわざ人間なんぞと会話せにやいけないのだ、とどこぞのRPGの魔王のようなことを思いながら、僕は部屋の中に完備したキッチンセットへ向かう。

冷蔵庫、ガスコンロ、ポット、などなどがそろった部屋の一角はなるべく部屋から出たくない僕がそろえた必需品だ。

「今日はカップラーメンにすっかー…」

ぼりぼりと頭をかきながらカップラーメンを取り出す。蓋を開けてポットを押せば、中に熱湯が入っていく。3分で完成だ。素晴らしい。

カップラーメンは引きこもりの味方だよなあ…としみじみ思っていた僕に、あの無機質な電子音が再度届く。

ピンポーン…ピンポーン…

何様だ。どこのどいつが僕の素晴らしい生活を邪魔している。

インターホンの音は、はっきり言って連続で聞いている気持ちのいいものじゃない。

僕はいらいらを抑えながらカップラーメンを持って下の階まで降りていった。

その間もうるさい電子音は響きまくっている。

「うるせえー…」

ため息を吐きながら画面を確認した僕は、一瞬全身の血が凍ったかと思った。手が震える。

画面に映っていたのは、ウチの生徒だった。クラスメイト？と思いつつよく見てみるが、その顔に見覚えは無い。

黒い長髪をなびかせて睨むようにカメラを見つめている彼女は、何故か仁王立ちだ。

ブレザーのポケットについているのが百合の花だから、僕と同じ三年なのは分かった。ちなみに1年はコスモス、2年は椿だ。

「…誰だこれ」

呟いた僕に反応するように、再度電子音が鳴る。

考えるより先に、僕は受話器を取っていた。

耳に当てた瞬間に我に返って焦る。どうしよう、何も考えてなか

った。

無言で焦り続ける僕はどうしようもないのでそのまま何も言えずにその場に棒のように突っ立っていた。

玄関前の彼女は僕が出たことに気づいたらしくカメラの前で数回咳払いをする。

…なんでそんなに気合が入った顔をするんだ。

困惑する僕の耳には、数秒の沈黙の後に、凜としたハスキーボイスが届いた。

『風鈴中学三年、生徒会長の八城くづゆだ。君は多野奏くんかな？』
妙に威圧感のある喋り方だ。僕は口の中が渴くのを感じながら小さくそれを肯定した。

…学校の人間と話すのははつきりいつて苦痛だ。あまりいい気分じゃない。

『「私の」学校で現在不登校となっている生徒は君一人なのは知ってるか？』

今こいつ『私の学校』って言いやがった。なんて人間だ。

それにしてもこいつも僕を学校に行かせたがるやつか？今になって…面倒くさい。

「いえ…知りません」

少し不機嫌さが声に出た。だが相手はさして気にしていないらしい、変わらない表情で話し続けた。

『そうか。ならそのことで話があるんだが…』

「言っておきますが僕は学校へ行くつもりはありません、その話をするだけ無駄です。それじゃ」

僕は受話器を切って、急いで2階上がった。部屋に入ってベッドの上に座る。

…なんで今更。ていうかなんで同学年相手に敬語を使ってるんだ僕。

あいつの雰囲気の原因なのだろうとは思うが、それにしても生徒会長直々に来るなんて。

「僕一人…か」

他の生徒はみんな普通に学校に通っているんだな…。僕だけが時間を止めたまま家の中ですごしてるってわけか。

はぁ、とため息を吐いた僕は、自分がそれを少し残念に思っていることに気づいて急いで頭を振った。

「んなことあつてたまるか。僕はこの生活が好きなんだ」

そう呟いてから、手の中のカップラーメンに気付く。ぼーっとしていたせいで気付かなかったがもうとくに三分経っていたらしい。僕はキッチンセットの中から箸を取り出そうと立ち上がった。

その時。

みし、…パリーンッ！！

「…え？」

僕の背後で凄まじい音が響いた。考えたくは無いが、僕の後ろにあるのはカーテンを閉め切ったままの窓だけだ。

…もしや。

ゆっくりと振り返った僕の目には、先ほどインターホンの画面で見たよりも濃くたなびく黒髪が映った。

「するだけ無駄とは何だ！話してみなければ分からないだろう！」

先ほどの会話を続けるかのように現れた生徒会長。僕はこの時点でようやく、彼女の異質さに気付いたのだった。

とりあえず、割れた窓を片付けて、そばの椅子に座る。

彼女は勝手に僕のベッドを上を陣取ると鞆の上に脱いだ靴を置いて僕を見つめた。

「…なんのようですか」

むつすりと言葉を紡いだ僕に、生徒会長は綺麗なハスキーボイスで答える。

「……ところでこの人、一軒家の二階に窓から入るってどんだけなんだ。」

「君に学校に来てもらいたい」

「……お断りします、って言いませんでしたか」

「なぜだ」

この人はどうやら話が通じない人らしい。

僕はため息を吐きながらラーメンをすすった。伸びたラーメンはあまりおいしくない。

「……僕が学校に行かない理由を貴方に教える義務はないはずです」
「そうだな。まあ私は君の理由は知っているからいい」
「は！？」

不機嫌に言った僕の言葉をさらりと流した生徒会長に、僕は驚きと苛立ちを同時に感じた。

知ってる、ってことは誰かから聞いたりしたってことだ。

ってことは僕が昔何をされたか知っているはずなのに、こいつは平気な顔をして来たってことだろう？……異常だ。

「私は生徒会長だからな。生徒のことは知る義務がある」

「義務、って……あんたそれプライバシーの侵害だろ！」

怒鳴る僕を彼女はそんなことはどうでもいいとでもいいそんな顔で見つめる。その涼しげな顔が余計に僕をイラつかせた。

「いきなり来て何なんだよ！僕が学校を休むのは僕の自由だろ！？」

「……落ち着け、多野」

「ていうか僕が休んでる理由知ってるならわざわざこんなとこまで来ないでまずあいつらを何とかしてくれよっ」

「それは出来ない」

「何で！」

僕がこんな風になった原因を先に直すべきなんじゃないのか？僕は何もしてないのに、どうして僕の方に皆来るんだ？

イライラをそのままぶつけるように睨みつける僕に、生徒会長は静かに答えた。

「私が解決したところで同じことの繰り返しだからな」

「……」

僕は怒鳴るのを止めた。

「私は、『私の』学校で不登校がいるのがとても悲しい。それが一人だけならなおさらだ。だから今日、私は生徒会長になって初めての大きな仕事を、君に学校に来てもらうことに決めたのだ」

「…僕は行かない」

脱力して椅子に座り込む僕を、彼女の澄んだ青色がじっと見つめる。

その目を見たくなくて、僕は生徒会長から視線をそらした。

「今はそう思ってくれていて構わない。でも卒業までには来てほしい」

「…行かないって言うてるだろ」

ここまで来ると、もう意地だ。来てほしい、と言われたところで簡単に行けるものではないし、逆にそう言われると行かない、という風になってしまうのだ。

僕は俯いたままじっとしていた。

「じゃあ、まずは私と友達になってくれ」

「は？」

唐突に変なことを言われた僕は、つい顔を上げてしまった。生徒会長が小さく微笑む。…美人だ。

彼女はベッドから降りると、僕が座っている椅子までやってきて、僕の手を取った。

いきなりのことに、顔が熱くなる。

「なっ…な！」

ぱくぱくと間抜けに口を開閉する僕に、生徒会長はそつと言った。「私の友達になってくれ。別に学校には来なくていい、とにかく私と友達になってほしいんだ」

「い、…いやだつて言つたらどうするんだよ」

心臓がばくばく煩い。僕は目の前に迫る生徒会長の端正な顔に釘付けになりながらも若干の抵抗を見せた。

このまま言いなりのように友達になるのは嫌だったのだ。

「それは困るな。私の友達1号がいなくなってしまう」

「…あんた、友達いねえの？」

想像とは少し違う答えに驚きながら聞くと、生徒会長は少し寂しそうに笑った。

「頼りにする生徒、というのは友達ではないだろうか？」

「…でも、頼りにされてるんだろ」

「まあな。だが私は、普通に放課後に遊んだり、お茶を飲んで話せる友達が欲しいのだ」

「ふうん…」

ということは、彼女にはそういう友達はいないと言うことになる。

…こういう話を聞くとどうにも無下に出来なくなるのは、僕の悪いところだ。

「別に…いいけど。友達くらい」

気付いたら、そう答えていた。答えた後に、しまった、と思う。

「ほんとか!？」

「え、いやっ、違ッ」

「ありがとう、奏!」

「う…」

否定しようとした僕の手をぎゅ、と握り締めて、生徒会長は笑った。その顔がちよっと可愛かったりしたもんだから、僕は答えることも出来ずに結局彼女の友達となってしまうたのだった。

…つか、いきなり名前呼びかよ!

あれから2週間。彼女は毎日放課後になると僕の家に来るように

なった。

親には言ってない。どっちにしろ会うことはないから、言う必要もないと思っただし。

「かなでー！今日は生徒指導の先生からおせんべいを貰ったぞ！」
友達になろう発言から、一度も学校に来いとは言わなくなった生徒会長。当初の目的を忘れてるんじゃないかと思いつつも楽しかった僕は、何も言わずに彼女と普通に『友達』をしていた。

がさがさとスーパールの袋を揺らしながら、彼女は新しくした僕の部屋の窓（代金は会長持ちだ）から入ってくる。…普通に入ってきて来れないのか。

「…生徒会長のくせに先生から何貰ってんだ」

「くれるものはしょうがない。それに、今の私は生徒会長ではない。ただの八城くづゆだ」

「へーへー、そうですか」

ポットの湯を急須（生徒会長持参）に入れながら答えると、彼女はやけに子供らしい仕草でむ、と膨れた。

大分僕たちは友達としてゆったり過ごせるようになってきていると思う。

学校にいけば、もしかしたらこんな友達もつと増えるのかも、と思いつつ、僕はお茶を入れたコップを渡した。

「ところで奏。今日はちょっとした頼みがある」

「何？」

椅子に座りながら聞くと、生徒会長は少しためらいがちに呟いた。

「奏に、…うちの副会長をやってもらいたい」

「…へ？」

「だ、だめならいいんだ。奏に無理をさせるつもりはないし、仕事は私だけで十分出来てる」

いつになく不安そうに呟く生徒会長に、僕は協力してあげたい、とは思ったけれどそれは出来そうに無い。

やっぱりまだ、学校と関わるのが怖いんだ。

「…ごめん、ちょっと…無理かも」

「そ、…そうか。ならいい」

僕の言葉に、彼女は少ししょんぼりした笑みを浮かべていて、悪いことをしたような気分になる。けれどこれだけは気持ちの問題だし、どうにも出来なかった。

きまづい沈黙が流れる。

「…え、と」

さすがにきつい、と思った僕が口を開いた瞬間、生徒会長が立ち上がった。

「か、かなで！」

「え…何？」

黒い長髪がさらさら揺れる。

「…もう一つ、頼みがあるんだ」

「頼み？」

僕が首を傾げると、生徒会長は少し顔を赤くしながら小さく呟いた。

「…私の、名前を呼んで欲しい」

「え」

つられて僕も赤くなる。お、女の子の名前を呼ぶ！？

「…私には友達がいなかったから…、名前で呼び合ったりとかしなかったんだ。…だ、だから、奏とは名前で呼び合いたい」

「あ、そ、そっか！…え、と、じゃあ…くづゆ？」

ものすごく恥ずかしい思いをしながら小さく名前を呼ぶと、生徒会長、もといくづゆはばあ、と嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう」

「え、あ…まあ、と、友達だしね」

「そっだな！」

本当に嬉しそうに笑うくづゆにこっちまで嬉しくなって、友達っていうのも悪くないな、と僕は思ったのだった。

そんなことがあった次の日。突然にくづゆが来なくなった。

その次の日も、そのまた次の日も。

何かあったんだろうか、と最初は心配して、そのあと僕は一つの結論に達した。

『くづゆはきつと僕に飽きたんだろう』と。

そう思ったほうが、他に考えたいくつもの理由の中では一番良かったのだ。

僕の生活は前のように戻った。昼過ぎまで寝て、ゲームして、漫画を読む。

「…つまんねえ」

ただ、前と違ったのは、くづゆがいないこと。そしてそのせいで、前まで楽しかった生活が何も楽しくなくなったこと。

いつの間にか、僕はくづゆと一緒にいるのが嫌じゃなくなったどころか、くづゆと一緒にいたいと思っていたことに気付く。

…どうして、くづゆは来ないんだろうか。

僕に飽きたんだ、と結論付けるのは簡単だ。けれど、あの二週間の間で、くづゆがそんな人間じゃないことは分かっていた。

きつと何かがあったんだろう。だけど学校に行っていない僕には、その『何か』が分からない。

…。

くづゆはもう5日も来ていない。今日は金曜日だ。くづゆの家を知らない僕には、明日明後日はくづゆに会えないことは分かっている。

…今日、なら。…学校にいけば、もしかしたら。

「…馬鹿じゃないのか」

あんなに学校に行かないって言ったくせに、二週間、女子と遊んだぐらいで行くのかよ。そんなもんだったのか？僕の決意は。

そう呟いた僕の心の中に、僕は何か違和感を感じた。

「……決意って、なんだよ」

学校に行かない決意。…なんてくだらない決意なんだろう。こんなのは決意じゃない。違う。

僕はベッドから跳ね起きると、タンスの奥から制服を引っ張り出した。

しわくちやのパジャマを脱ぎ捨てて、ワイシャツに袖を通す。どこに置いたか分からないネクタイと鞆も引っ張り出すと、僕はぐちゃぐちゃの髪を手で梳いて下まで降りていった。

明日も明後日も、待てない。今すぐ、会いたい。

ほぼ走るように玄関まで行って、靴箱からローファーをかきだし、急いで履く。

もう放課後だ。もしかしたら帰ってるかもしれない。

久々に、僕は制服で外に出た。

今までは怖くて入れなかった校門も走り抜けて、事務のおばさんに聞く。

「あのっ、生徒会長ってどこにいますか!？」

いきなりの質問にびっくりしながらも、おばさんは丁寧に生徒会室にいますよ、と教えてくれて、場所の地図までくれた。

急いでそこまで走る。3階の一番奥だった。

「はっ…はあ…っ」

全然部活もしてない身体には少しきつくて、僕は廊下を荒い息で歩く。上履きは履いてなかった。

廊下を歩く、部活の生徒の視線が痛い。気まづくなった僕は、急いで生徒会室まで走った。

ほとんど脱力した腕でノックを三回。

「…どうぞ」

扉の向こうから聞こえたのは、聞きなれたあのハスキーボイス。
「失礼しますっ」

出来るだけはっきりした声で僕はその扉を開けた。

そこにいたのは、くづゆ、一人。

「…か、かなで!？」

いつになくびっくりした様子で、くづゆは机の上が見えなくなるまでの書類に埋もれていた。

…仕事は十分に出来てる、なんて嘘だった。

久々に見たくづゆの顔は僕が見ても分かるほど疲れきっていて、目の下には隈が。

「くづゆの嘔吐き。仕事出来てねーじゃん」

…大丈夫だ、私は生徒会長だから、出来る」

そう言ったくづゆの顔は泣きそうだった。綺麗なハスキーボイスも、震えていて台無しだ。

「奏は、どうして…来たんだ? あんなに嫌がってたのに」

がらん、とした誰もいない生徒会室の椅子に座る。

ちよつと言うのは気恥ずかしいと思いながらも、僕はくづゆを見つめて言った。

「くづゆが、家に来ないから」

「え…」

「来ないから、もういいのかと思って、それで、不安になって、来た」

「…そ、そう、か」

ぎくしゃくと答えたくづゆは顔を赤くして書類の整理に入ってしまった、僕は何をしたらいいのかわからなくなる。

…。

「くづゆ!」

僕はとあることを『決意』して、立ち上がった。くづゆがびっく

りした顔で僕を見上げる。

「僕、副会長やるよ。この前断っておいて、何だけど」

「本当か!？」

「…うん」

微笑んでみせると、くづゆは嬉しそうに僕に微笑み返した。

この日、僕は風鈴高校生徒会副会長になった。

色々どころか全部が全部大変なことばかりだろうけど、くづゆとなら頑張れると思った。

まずは、引きこもり脱出からだ！

と、僕はその日、改めて、新しい思いを『決意』したのだった。

卒業式に、見事引きこもりを脱した僕がくづゆに告白するのは別の話。

（後書き）

突然降りてきた話なので一気に書き上げました；；
ところどころおかしいところだらけです。

連載にする時間がないのを無理に短編にした感じなので詰め込み過ぎた感…o y z

くづゆ視点の『頑張れ生徒会長！』という話も書いてみました。
若干省略気味な話。話の流れも変わってないです。
暇だったら読んでみてくださいい^^；

【追記】

なんだかあまりにも続きを希望してくださるので…一応連載らしきものを始めました。

『風鈴中学生徒会！』で見つかります。あ、てか一覧で見つかります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4474g/>

引きこもり副会長！

2010年10月8日15時31分発行